

2020年8月27日

資料室だより 126

第29期本科卒業生のご寄付により下記の洋書を購入しました。

+The Medieval Offices of Saint Thomas Aquinas「トマス・アクイナスの中世聖務日課」 (ヘルシンキ、2019年)

ドミニコ会士にして神学者、スコラ哲学の体系を築いた「神学大全」の著者トマス・アクイナス(1225-1274)は中世の神学・哲学の代名詞のような人物で聖人でもあります。聖体の祝日の聖務日課を整えたのもこのトマスであり、彼は神学者として有名になる前はむしろ聖歌作者として知られていました。その、トマスが列聖され、彼の祝日のための聖務日課がドミニコ会で編纂されます。いわゆる「聖人聖務日課」といって韻文のテキストを歌にして聖人の生涯と聖性をたどるものです。1. トマスとその韻文聖務日課、2. 聖歌と典礼の分析、3. 聖務の歌、4. 典礼における感覚的体験、という項性になっており、楽譜もすべて所収されていますので大変興味深いものです。ドミニコ会という13世紀の托鉢修道会固有聖歌として時代のコンテキストの中で考察されます。

トマス自身はコントラファクトゥムという中世の作曲技法のひとつにたけていたとも言われます。神学と音楽はこの時代分離しておりませんでしたので、神学研究に向かう同じ能力で音楽にも向き合っていたということで教会音楽を勉強する皆さんにも無関係の聖人ではありません。

興味深いことにこれは北欧系の研究者たちによる出版で、彼らはフィンランドのシベリウスアカデミー、ヘルシンキ芸術大学にかかわる人々の研究のようです。

+Atti del Congresso Internazionale di Musica Sacra(Pontificio Istituto di Musica Sacra) (パチカン、Libreria Editrice Vaticana, 2013年)

これは教皇庁立宗教音楽研究所の主催する国際学会の会議録の形をとった論文集です(表紙絵にフランシスコ教皇のカラー写真があります)。Kongress Bericht といって学会録に基づいて後にこのような論文集が編纂されるものですが、こういった論集は研究の最先端を表す面もあり非常に貴重です。グレゴリオ聖歌や古ローマ聖歌に関するもの、またユグノーであるル・ジュヌのダビデ詩編に関する「言葉と沈黙の間の音楽」という興味深い論文も、またカルロ・ボロメオ(16世紀のミラノの司教、イエズス会士)と音楽に関する研究(最近注目されてきていると思います)など私の個人的観点からみましても枚挙にいとまがないほど充実した多岐にわたる論集です。3巻本で、ケース入りの分厚い書籍です。グレゴリオの家はなによりもまず宗教音楽研究所でありますのでふさわしいと思い購入いたしました。皆さんの研究にお役立てください。

杉本ゆり 記